



地域資料室の紹介～背ラベルの「L」ってなあに？～



背ラベルとは？

背表紙に貼られたラベルです。ここにかかれた番号によって図書館の本は並んでいます。

図書館内の他の場所の本と見分けがつくようになっていますよ。

探しやすいいね



だったら、「L」とは何ぞや？



四日市市立図書館では地域資料室の本に「L」の記号を付けています。(別置記号といいます)

「L」は「Local(地方/地域)」の頭文字を意味しています。

Q: 「L」の本って貸出できない本ばかりなんだけど…？



ねえねえ、でもちあ

貸出できる本もたくさんあります。借りたい本がある時は職員におたずねください。ただし、資料の破損・紛失を防ぐため、また地域資料をいつでも調べ物に利用いただけるようにするため、一部貸出できない本もあります。ご了承ください。

ちなみに、

「Y」という記号が付いた本もあります。

この地域にお住まいの方がつくられた文学作品や個人誌などを、地域資料室の一面に別置記号「Y」を付けて集めています。この「Y」は「Yokkaichi」の頭文字を意味しています。

地域資料室のちょっと読んでほしい本



辻智子 著 北海道大学出版会

『繊維女性労働者の生活記録運動』 2015年発行 (L586)

この本は、東亜紡織の泊工場(四日市市)で行われた「生活記録運動」について書かれています。「生活記録運動」とは、1950年代に盛んに行われ、自身の生活をありのままに書き、仲間内で見せ合い、話し合う活動です。泊工場労働組合の文化活動として始まった、生活記録サークル「生活を記録する会」で綴られた文章や通信を、当時の女性労働者の状況と合わせてわかりやすく論じています。

この活動に関わった澤井余志郎や訓覇也男に関する著作なども合わせてご覧ください。

- ・「紡績女子工員生活記録集」第1～12巻,生活を記録する会,日本図書センター,2002～2008(L586)
- ・「ガリ切りの記」,澤井余志郎,影書房,2012(L519/12)
- ・「本来無一物 訓覇也男追悼文集」,清水武,東海出版,2006(L289/㍻/06)



四日市萬古の創始者たち

現在、萬古焼が四日市の産業として定着しているのは、明治時代の3人の先覚者たちの功績によるものです。四日市萬古のはじまりを見てみましょう。

萬古焼（ばんこやき）とは。

江戸時代中期に桑名の沼波弄山により小向村（現三重郡朝日町）で始まった。一旦衰退するが、江戸末期に森有節が再び小向にて復興させた。全国に広がり、東日本においても「萬古」の名の焼き物が伺える。

萬古焼を地場産業へ。量産体制をつくる

山中 忠左衛門(1821 文政4年～1878 明治11年)

八郷村伊坂に生まれ、末永村の地主で村役である山中家の養子となる。若いころから焼き物を好み、特に森有節に魅せられていた。唯福寺の海蔵庵窯 ※1 に触発され、嘉永6年(1853年)には自作の窯を設ける。秘匿されていた有節の技術を研究、後に萬古焼の量産にも着手する。これは、当時度重なる水害に困窮した末永村を救うためでもあり、失業者や貧困者を窯に雇い入れ、土を与え器具を貸し指導を行ったという。また、陶法を一般公開したことでそれに倣って窯を開業するものが増え、陶磁器産業の地盤が築かれた。

※1海蔵庵窯…唯福寺の住職の田端教正が境内に作った窯

「金に困ったら山忠にゆけ」

困窮した人たちにとって忠左衛門は救いの神でした。伊勢暴動の際も幾人かの流れ者が身を寄せていたといひます。

鼻が高く
あだ名は「天狗さん」

人々から尊敬された堀友直

明治初期の萬古焼には垂坂山の白土が使われました。

友直が、一時その山を所有していたため、垂坂山は彼の名前の「大六良」にちなんで「大六山」とも呼ばれていました。

また友直は、その人格により海蔵村の初代村長も務めます。



販路と製品の産出に優れた慧眼の持ち主

堀 友直(1827 文政10年～1894 明治27年)

長島藩の武士で堀大六良菅原友直と名乗る。最初は長島で窯を開いたが、港のある四日市への経済推移を洞察した友直は、明治4年三ツ谷に窯を開く。腕利きの陶工と町中の腕達者を雇入れ工場を組織した。海外輸出に力を入れ、名古屋や横浜にも支店を設ける。横浜には窯を設け、四日市から運びいれた陶土で輸出用の陶器を焼いた（ハマ萬古）。七福神や天狗などの顔をつけた「面土瓶」や、鶉の形をした土瓶など、新奇なデザインで海外貿易を行った。

問屋、組合、合資会社…萬古産業を作り上げた先覚者

川村又助(1843 天保14年～1918 大正7年)

三重郡小古曾村出身。明治維新前は薬の行商を営んでいたが、明治8年に萬古焼問屋を開業。これは当時、販売が芳しくなかった窯元諸家の依頼によるものである。翌年には自身も窯を開く。全国各地を売り歩いたり、国内外の博覧会に出品することで、萬古焼の販路を広げた。明治18年には友直らと共に組合を設立。その後も、陶工のための研究会を創ったり、合資会社を起ち上げたりと萬古産業に尽くした。その功績を讃え様々な表彰、下賜を受けた。（詳しくは年表へ）



敬請！ 商売上手な川村又助

以前は店頭販売が中心で売上不振であった萬古焼を、天秤棒を担いで関東方面まで赴き、徒歩で行商を行いました。また、海外輸出も目指していたので四日市港に降り立つ外国人らを店に寄らせるよう仕組み、外国人の趣味嗜好を察知し、後の貿易の手がかりとなりました。その努力もあり販路が開け、萬古焼の需要は大きく拡大しました。

四日市萬古黎明期の年表 ～山中忠左衛門による産業化から川村又助死去まで～

年代	萬古焼業界の動向	時代背景
1870 明治3	山中忠左衛門が萬古焼の大量生産を開始。	明治3年 四日市の有力な出資者により汽船による東京～四日市間通商運輸が開始
1871 明治4	堀友直が三ツ谷に窯を開く	
1875 明治8	川村又助が萬古焼の間屋を開く	明治6年 稲葉三右衛門による港の改築が始まる
	フィラデルフィア万国博覧会開催につき、政府お買い上げの萬古焼品物製造世話掛を三重県より命じられる(又助)	
1876 明治9	又助、 <u>窯を開き製造販売</u> を始める	需要の拡大に伴い、粗悪な商品が多くなる。それらの矯正の策を同業者と講ずるとともに自らも始動
	又助、 <u>佐藤百太郎</u> からアメリカ現地の様子を聞く	
1877 明治10	第一回内国勸業博覧会に出品（忠左衛門、友直ら）	佐藤百太郎 実業家であり日米貿易の先駆者。日本における百貨店の創始者でもある。
1878 明治11	パリ万国博覧会に出品（忠左衛門、友直、又助ら）	
	友直、名古屋支店を設ける	明治17年 同業組合準則の制定
	山中忠左衛門死去	
1881 明治14	第二回内国勸業博覧会に出品（忠左衛門、友直、又助ら）	森欽太郎（2代目庄吉） 初代庄吉は山中忠左衛門のパートナーだった
1885 明治18	川村又助・堀友直・ <u>森欽太郎『萬古陶器商工組合』</u> を組織	
	友直、横浜支店を設ける	明治22年 東海道線の開通
1886 明治19	県下の徳行者等が参加する宴に三重県知事(石井邦猷)より招待。(又助)	
1888 明治21	又助、陶工の技術奨励のための研究会をはじめる	明治23年 関西鉄道 四日市～草津間 創設
1889 明治22	堀友直、海蔵村初代村長に就任	
1893 明治26	シカゴ万国博覧会の出品事務委員を三重県より囑託(又助)	明治27年 関西鉄道 四日市～桑名間開通
	<u>四日市商業会議所(後の商工会議所)</u> が設立	
	又助、四日市商業会議所の会員に選出される。	明治28年 関西鉄道 桑名～名古屋間開通 柘植～大阪間開通
1894 明治27	堀友直死去	
1900 明治33	又助、 <u>合資会社川村組陶器製造場</u> を設立	同業者の模範となる工場を建てようと設立。主にアメリカへ輸出していた。
1901 明治34	又助、農商務大臣より金十五円授与される	
1906 明治39	萬古陶器商工組合解散	鉄道網の発展により、萬古焼の鉄道輸送が可能になった。
	<u>『萬古陶磁器同業組合』</u> の設置	
	又助、萬古陶磁器同業組合の組長に就任	萬古陶磁器同業組合 四日市、三重郡、桑名の萬古製造者と商業者による組合。
1908 明治41	又助、内務大臣より戊申詔書謄本を賜る	
1911 明治44	又助、報徳表彰規程により彰功状ならびに金員を賜る	明治30年 重要輸出品同業組合法の制定
1917 大正6	又助、官より萬古焼陶器に関する功労を賞し銀杯を賜る	
1918 大正7	川村又助死去	明治33年 重要物産同業組合法の制定

明治時代の萬古焼産業が調べられる資料

※一部の資料をのぞき貸出できます。

	資料名	著者/発行者	発行年	請求記号	貸出
①	文化展望・四日市 ラ・ソージュ20	四日市市文化振興財団	2003	L051	○
②	三重県史 通史編近現代 1	三重県	2015	L200	○
③	伊勢の歴史と文化	早稲田大学日本地域文化研究所 /行人社	2009	L210	○
④	四日市志 附 名所案内	伊藤善太郎	1907	L223	×
⑤	四日市市史（昭和5年版）	四日市市教育会/名著出版	1973	L223	○
⑥	四日市市史第18巻	四日市市	2000	L223	○
⑦	海蔵小誌 復刻版	海蔵小誌編集委員会/海蔵地区 地域社会づくり推進委員会	2000	L223	○
⑧	四日市の礎 111人のドラマとその横顔	志水雅明/四日市市文化協会	2009	L282	○
⑨	広報よっかいち 平成3年度分集録	四日市市役所市民部地域振興課	1992	L31	○
⑩	四日市萬古焼史	満岡忠成/萬古陶磁器振興会	1979	L573	○
⑪	萬古 陶芸の歴史と技法	水谷英三/技報堂出版	1982	L573	○
⑫	四日市萬古焼 萬古焼の歩みと現代の作家たち	四日市萬古陶芸協会	1987	L573	○
⑬	萬古焼 伊勢の茶陶	四日市市立博物館	2005	L573	○
⑭	よくわかる四日市萬古焼読本	萬古陶磁器振興協同組合連合会	2010	L573	○
⑮	改訂版 萬古不易 四日市萬古焼のあゆみ	和木康光他/急須愛好の会	2015	L573	○
⑯	萬古物語	朝日町歴史博物館	2018	L573	○
⑰	ばんこやきの見方	四日市市立博物館	2018	L573	○
⑱	萬古焼の粋	BANKO300th実行委員会他	2018	L573	○
⑲	輸出陶磁器と名古屋港	末吉順治/中日出版	2020	L573	○
⑳	三重県事業史	第九回関西府県聯合共進会	1907	L60	○
㉑	三重県の産業と産業人	桐井宗雄/名古屋新聞社地方部	1930	L60	×
㉒	大日本産業事蹟2（ワイド版東洋文庫）	大林雄也/平凡社	2007	L602	×
㉓	三重県史資料調査報告書21	三重県生活部	2006	L606	×

明治時代の萬古焼

当時の萬古焼にはどのようなものがあったのか一部紹介します。

明治
初期

手捻(てびねり)

手捻りの名工「三助」(山本利助、伊藤豊助、小川半助)が有名です。指先の圧力で均一の厚みに成形していく技法は熟練かつ陶工の天分が必要であり、名工のそれは紙かと思うような薄さです。この時期の萬古焼に使われていた白土は精細なこの技法にとっても適したものでした。



明治
初期

外国向け輸出用の商品

川村又助や堀友直が輸出用に作成したもの。諸外国の需要や趣向に応じた作品が数多く作られました。日本特有のデザインが用いられていることが多いです。首振り人形や、魚介類・人物等をかたどった土瓶など、ユーモラスな作品がみられます。



明
治

紫泥(しでい)

明治20年頃になるとこれまでの白土が枯渇し、同じ垂坂山で採れる粒密度では遜色のない赤土を使うようになりました。現在の萬古焼の主流の一つである黒紫色の焼き物はこの時に誕生しました。